清流NEWS

Vol. 86
発行
日野市
環境共生部
緑と清流課

〒191-8686　東京都日野市神明１-12-１　Tel 042-585-1111
発行日　１月・４月・７月・10月

湧水保全先進地 日野を訪ねて

こんこんと湧き出す黒川清流公園湧水群を最初に訪れたのは、今年10月2日に行われた第35回多摩川流域セミナーの下見の時、確か初夏の頃であった。日野といえば、湧水と用水の町という印象を持っていたが、実際に現場に足を運んだことはなかった。初めて訪ねてみて豊かな湧水量に圧倒されてこれは凄いと感心した。周辺の林は、早くから都と日野市によって保全されていると聞き、なるほどと思った。幾筋もの湧水は、群れをなして流れ出し、川を形づくり悠々と流れていた。この湧水は、一体どこから流れてきているのか、どのくらいの歳月をかけて地表に現れてくるのだろうと不思議に思いながらその日は現場を離れた。

多摩川流域セミナー当日には、地元日野市をはじめ流域各地から80名の市民が参加して湧水観察会とディスカッションが行われた。日野駅北口に集合した参加者は、マイクロバスに分乗して黒川清流公園湧水群と図書館下湧水群に向かった。湧水群では、日野市緑と清流課の原課長がそれぞれの湧水の特徴について分かりやすく解説した。図書館下湧水群では、流れ出した水は、豊田用水に合流し、日野市の用水網の一翼を担っている様子に参加者は見入っていた。

ディスカッションでは、日野市の原課長と環境市民会議の酒井さんが「日野市の湧水保全の取り組み」について行政側と市民側の双方から報告があった。原課長は、「昭和51年に清流条例が制定され、湧水や水辺の保全が開始されたこと、以前は田んぼの時期しか通水していなかったが生き物も棲める用水にしようと年間通水にしたこと、昭和58年に水路清流課を立ち上げたこと」などの紹介があった。

環境市民会議の酒井さんは「日野市には、昔から非常に沢山用水があるが、現在どれだけあるかが分かっていない状況だったので、用水カルテプロジェクトを立ち上げ、月に2回一日かけて歩き、市内地図を元に歩いたら126キロに渡って用水残っていた。用水というと多摩川や浅川から引き入れていて、湧水と関係ないと当初思っていたが、豊田用水と黒川用水だけは湧水を起源とした形で十分成り立っていることが判明」したことや湧水マップづくりに取り組んだこと等、市民らしい調査とその成果が報告された。

ディスカッションでは、小倉先生や京浜河川事務所の坪谷調査課長の報告に続き、参加者による活発な意見交換が行われた。コーディネーターの神谷博先生は、全体のまとめで「地下水の調査を日野市以上にやっている自治体はないと思う。湧水のデータの蓄積を全市的にきちんとやっている非常に先駆的な場所だ。湧水保全の先進自治体と言っていい。わき水の起源は何なのか、雨水涵養説、浅川起源説など議論されているが、地下水にはまだ分からないことが結構多い。最近、ゲリラ豪雨の発生が頻発する中、今までやっていた流出抑制、雨水浸透桝の設置、川や下水の処理などでも限界が見え始めている中、外国ではすでに取り組まれているが建築学会で雨水建築の基準づくりが開始された。建築物が一つ一つある程度溜める。何トンか溜める。時間差を置いて流すなど都市全体で洪水対策も必要になっている」と述べ、今後の課題も明らかになった。

私自身、今度のセミナーを契機に日野市への愛着と関心が深まった。家族で湧水や用水めぐりに出かけたいと思っている。最後に、参加者の感想を紹介する。

・「都心からほど遠くない住宅地と隣り合わせで、自然のあれほど透き通った水流、池の姿を見ることができ、大変驚いた。逆に違和感さえあった。このセミナーでよく学んで帰りたい」

多摩川流域ネットワーク代表
多摩川源流研究所
所長　中村　文明

R70　このNEWSは再生紙を使用しています。